



Title	モンテーニュにおける<<vertu>>実践の問題 : エピク ロスの「快樂」との異同をめぐって
Author(s)	徳永, 雅
Citation	Gallia. 1995, 34, p. 1-8
Version Type	VoR
URL	<a href="https://hdl.handle.net/11094/10614">https://hdl.handle.net/11094/10614</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

## モンテーニュにおける « vertu » 実践の問題 —— エピクロスの「快樂」との異同をめぐって ——

徳 永 雅

『エッセー』全篇を通し « vertu » という語は、一般に訳される「徳」という意味ばかりでなく様々な意味において用いられているが、ヴィレーも指摘しているように、モンテーニュにおける « vertu » 観は「勇氣」というストア派的なものから「快樂」というエピクロスの自然主義的なものへと時期的な進展を遂げたとされている<sup>1)</sup>。とはいえ、モンテーニュが結局辿り着いた « vertu » 観とは、エピクロスの « vertu » 観の焼き直しにすぎなかったのであろうか。また、当時の道德教育が « vertu » の分類や語義の教授に終始するのみで、« vertu » を実人生で如何に行使すべきかについての指導を怠っているという、『エッセー』第2巻第17章の一節における著者の批判的視点に顕著なように、モンテーニュが常に重要視していたものは、« vertu » の理論的な面よりはむしろ実践面ではなかったであろうか<sup>2)</sup>。この両問題は、相互に関連づけながら解明されるべきものである。以下、本稿では、モンテーニュの最終的な « vertu » 観を、その影響源とされるエピクロスの « vertu » 観との異同を考察することを通して明らかにし、その上で、« vertu » 実践の方法をモンテーニュが如何に認識し、彼自身どのように « vertu » を実践しようと考えていたかを跡付けてみたい。

1) 『エッセー』には « vertu » という語が290回（単数で265回、複数で25回）用いられており、これはあらゆる実詞の中で13番目に多いものである。Roy E. Leake, *Concordance des Essais de Montaigne*, Genève, Droz, 1981, t.II, pp.1306-1308. ヴィレーの説については、Pierre Villey, *Les Sources et l'Évolution des Essais de Montaigne*, Hachette, 1908, 2 vol. 参照。ヴィレーは、モンテーニュの思想がストア主義から懷疑主義を経てエピクロスの自然主義へ発展したという枠組みに基づき、道德観念についても、ストア主義からエピクロスの自然主義へ時期的に進展したと述べているが、論者は前稿において、ヴィレーの説を基本的には首肯しながらも、同時にこの変化が、実は1580年の初版出版以前に書かれた『エッセー』第2巻第11章という一つの章の中で、「他者」を描き考察するという行為（これを論者は、モンテーニュ研究の術語である「自己描写」に倣って「他者描写」と名付けたのであるが）を通して実現したことを明らかにした。拙稿「L'évolution de l'idée de "vertu" chez Montaigne — La signification de la "peinture d'autrui" — », in *Études de Langue et Littérature françaises*, N° 64, pp.3-15参照。

2) Montaigne, *Essais*, éd. Villey-Saulnier, PUF, 1965, p.660. 尚、『エッセー』からの引用は全てこの版を用いる。

## I. モンテーニュの最終的 « vertu » 観

<sup>(c)</sup> 哲学者が何と言おうと、徳においてさえ、我々の目指す最終的な目的は快樂なのである。〔中略〕徳に対して我々は、かつて名付けた「力強さ」という名ではなく、もっとふさわしく、もっと優しくて本来的な「快樂」という名を与えるべきであったろう。(I, XX, p.82<sup>3)</sup>)

この一節は、『エッセー』の1588年以降、すなわち著者が最晩年に加筆した部分である。「我々の目指す最終的な目的は快樂」であり、「*vertu*」に対して「*plaisir*」という名を与えるべきだとするこの見解は、「*vertu*」という語を「*courage*」や「*vaillance*」の意味で用いることの多かった1580年以前の観点とは相容れないものである<sup>4)</sup>。モンテーニュはこの考えを所謂快樂主義者と呼ばれるエピクロスから学んだのであるが、多作であったとされるエピクロスの著作は散逸し、モンテーニュの時代においても、また現代においても、エピクロスによって実際に書かれたテキストは、ディオゲネス・ラエルティオスの『哲学者列伝』の中に、三つの『手紙』と『主要教説』の写しが残されているのみである<sup>5)</sup>。実際『エッセー』には、三つの『手紙』の一つ『メノイケウス宛の手紙』を読んだとモンテーニュ自身が言明している箇所があることから、エピクロスの倫理観が凝縮されていると言われるこの手紙を考察することによって、エピクロスとモンテーニュとの「*vertu*」観の異同を解明することが可能となるのである<sup>6)</sup>。

既に引用した「我々の目指す最終的な目的は快樂である」という一節は、『メノイケウス宛の手紙』の中の「快とは祝福ある生の始め（動機）であり終り（目的）である」<sup>7)</sup>という一節を典拠としていると思われる。これは、エピクロス派の第一原理が「快樂」に他ならないとして引用される最も有名な箇所であるが、従来こ

3) 『エッセー』からの引用箇所は本文中括弧内に示し、最初のローマ数字は巻を、二番目は章を表す。引用文頭の記号(C)は1588～92年の執筆部分を、以下(A)は1580年以前の、(B)は1580～88年の執筆部分を表す。尚、日本語訳は既訳を参照した上での拙訳である。

4) 意味別、年代別の語の使用頻度については、前掲の拙稿 p.4の表を参照のこと。

5) 但し、三つの『手紙』の内、第一の『ヘロドトス宛の手紙』は自然学について、第二の『ピュトクレス宛の手紙』は天界・気象界の事象について、第三の『メノイケウス宛の手紙』は生き方、倫理観について、エピクロス自身が自分の教説を要約したものであり、これらの手紙を通してエピクロス哲学の骨子を把握することが可能である。

6) Cf. *Essais*, I, XXVI, p.164.

7) 出隆・岩崎允胤訳、『エピクロス——教説と手紙』、岩波文庫、1959, p.70. ヴィレーによれば、ディオゲネスのフランス語訳は1588年の時点ではまだ存在せず、モンテーニュはラテン語訳を読んだとされているが (Cf. Villey, *op.cit.*, t.I, p.117.)、本稿では、引用にあたって、ギリシア語原典訳の上記訳書を借用した。

の部分が前後の文脈から切り離され一人歩きしたことで、エピクロスの哲学は「快樂」のみを追い求めた道楽者の哲学と解釈されがちであった。しかしこれに続く部分でエピクロスが、「われわれは、どんな快でもかまわずに選ぶのではなく、かえってしばしば、その快からもっと多くのいやなことがわれわれに結果するときには、多くの種類の快は、見送って顧みない」と書いていることから明らかなように、彼はあらゆる「快樂」を是認しているわけではない。エピクロスにとって、彼の求める「快樂」は次のようなものである。

快が目的である、とわれわれが言う時、われわれの意味する快は、——一部の人が、われわれの主張に無知であったり、賛同しなかったり、あるいは、誤解したりして考えているのとはちがって、——道楽者の快でもなければ、性的な享樂のうちに存する快でもなく、じつに、肉体において苦しみのないことと靈魂において乱されない（平静である）こととにほかならない<sup>8)</sup>。

エピクロス自身が言明しているように、彼の目指す「快樂」とはただ苦しみが無く乱されないことである。すなわちマルセル・コンシュが言うように、それは「消極的な性質」のものなのである<sup>9)</sup>。

モンテーニュはこの点をどのように理解しているのであろうか。『エッセー』には、「エピクロスの教えに従って私が思うに、快樂もさらに大きな苦痛をとまなうならば避けるべきであり…」(II, XXXVII, p.765)という記述がある。すなわち、全ての「快樂」を求めるべきではないというエピクロスの言説を彼は正しく理解し吸収しているのであり、この点については、「快樂」の本質について述べている以下の一節においても同様である。

<sup>(1)</sup> われわれの良い状態とは、悪い状態の欠如に過ぎない。そのために、快樂に最大の価値を与えた哲学の学派はさらに、快樂をただ苦痛のない状態としたのだ。苦痛を全く持たないということこそ、人間の望みうる最大の幸福なのである。(II, XII, p.493)

「快樂に最大の価値を与えた哲学の学派」がエピクロス派を指していることに疑問の余地はない。モンテーニュは上記エピクロスの一節に基づきつつ、「<sup>アン</sup>苦<sup>ド</sup>し<sup>ラ</sup>みのない状態」こそがエピクロス派の「快樂」の本質であると言明している

8) エピクロス、前掲訳書、p.72.

9) Marcel Conche, *Montaigne et la Philosophie*, Ed. de Mégare, 1987, p.89.

のだ。エピクロスの同時代人の一部が誤解していたのとは異なり——おそらくはモンテーニュの同時代人の一部も誤解していたであろうが——、彼はエピクロスの主張する「快樂」の本質を正確に捉えた上で、自分自身の思考の一部に取り込んでいるのである。

しかし、果たしてモンテーニュは、「快樂」についてエピクロスと全く同様に考えていたのであろうか。先に引いた各々の「快樂」観に続く部分を比較してみよう。

けだし、快の生活を生み出すものは、つづけざまの飲酒や宴会騒ぎでもなければ、また、美少年や婦女子と遊びたわむれたり、魚肉その他、ぜいたくな食事が差し出すかぎりの美味美食を楽しむたぐいの享樂でもなく...

〔エピクロス〕

<sup>(1)</sup> というのも、ある種の快樂において出合い、単なる健康や無痛よりも上に我々を持ち上げるように思われる、あのくすぐるような快感や刺激も、あの活発な、気持ちをかき立てる、なんともしれない、焼けるような、かむような快樂でさえも、その目指すところはただ無痛だからである。〔中略〕／そこで私は言う。もし単純さが我々を苦痛のない状態に向かわせるとしたら、それは我々を我々の本性にふさわしい極めて幸福な状態に導くものである。

(II, XII, p.493)

〔モンテーニュ〕

エピクロスは具体的な例を引きながら、食欲や性欲の充足からくる肉の享樂は彼の目指す「快樂」ではないと断言している。これに対しモンテーニュは比喩的な表現を用いつつ、肉の享樂の目指すところも結局は「無痛」であるとし、肉の享樂をエピクロスのように全面否定しているわけではない。ここで、エピクロスとモンテーニュの「快樂」及び「無痛」の考え方に差異が生じ始めている。

さらにモンテーニュは、1580年以前に書いた先の引用部分の直後に、1588年以降次のような加筆を行っている。

<sup>(2)</sup> しかし、その単純さを全く味わいがいいほど鈍いものと想像してはならない。実際、クラントールがエピクロスの言う無痛に反対したのはもっともであった。もしそれが苦痛の接近も発生も存在しないほど深くに築かれたものであるとすれば。私はそんな、可能でもなければ望み得もしない無痛を少しも褒めはしない。〔中略〕実のところ、苦痛の感覚を根絶するならば、それと同時に快樂の感覚をも根こぎにされ、挙げ句のはてに人間を無に帰してしま

うであろう。(II, XII, p.493)

ここに至ってモンテーニュは明確に、エピクロスの「無痛」に反対したクラントールに同意を示している。モンテーニュにとって重要なのは、あくまでも「生を味わう」ことであり、「快樂」を得るためには「苦痛」の感覚も不可欠なのである。「苦痛」は人間を人間たらしめている要素であり、「快樂」と「苦痛」とは実体を同じくするものなのだ<sup>10)</sup>。すなわちモンテーニュにとって「快樂」とは、時に「苦痛」を伴う肉的享樂をも含んだものであり、エピクロスの「快樂」がどちらかといえば観念的であるのに対して、より实际的でいわば官能的な「快樂」なのである。

しかし、肉的享樂を否定せず、むしろ積極的にこれを求める姿勢を打ち出しているとはいえ、モンテーニュは享樂に耽溺することを奨励しているわけではない。では、どのようにすれば道楽者の立場でもなく、エピクロス派のような厳格な立場でもない、中庸の立場に身を置けると考えたのであろうか。「哲学は、そこに節度が加わっている限り、自然の快樂をやっつけはしない。節度は説くが回避は説かない。」(III, V, p.892)すなわち「節度」をもって「快樂」を求めることが必要であるとモンテーニュは考えているのだ。「節度」は一般的に「快樂」とは相容れないもののように思われるが、「不節制は快樂にとって疫病である。節制は快樂にとって災いではなく薬味である」(III, XIII, p.1110)とあるように、彼にとってはそうではなかったのである。

モンテーニュが最終的に行き着いた「*vertu*」観とは、エピクロスの言う「無痛」を理想とする「快樂」ではなく、肉的享樂をも含むもっと实际的な「快樂」であった。ただし「快樂」に没入することなく、また避けることもなく、真の意味で「*volupté*」を享受するために「節制」こそが不可欠な要素だったのであり、いかに「節制」するかという問いは、いかに「*vertu*」を実践するかという問いへと連動してゆく。

## II. モンテーニュにおける「*vertu*」実践の問題

「快樂」を主題とする『エッセー』第3巻第5章には次のような一節がある。

<sup>11)</sup> 私は自分の人生の楽しみの上を素通りし、不幸にしがみつki、それをむさぼる気難しく陰気な精神は大嫌いである。それは、すべすべしたなめらかな

---

10) Cf. *Essais*, II, XX, p.673.

ものにはとまることができず、ごつごつした凸凹の場所にとまって休む蠅や、悪い血だけを求めて吸う蛭のようなものである。

しかし、そもそも私はあえてすることは全てこれをあえて言うように自分に命じてきたし、人に公表できない考えというものの自体が気に入らない。

(III, V, p.845)

モンテーニュは、「快樂」を味わうことのできない人を蠅や蛭という直喩を用いて痛烈に批判しているが、また一方で「快樂」にのめり込み過ぎて「人に公表できないような考え」にも嫌悪を示している。前章で見たように、「快樂」を避けることも、またそれに没入することも同様に非難されている。さらに1588年以降、これに続く部分に「もし全てを言うことを自らに課すとすれば、黙っていなければならないようなことは何もしないよう拘束されるであろう。〔中略〕自分の悪徳を口に出すためには、それに目を向け研究しなければならない。それを他人に隠している人は、普通自分にも隠しているのである」(III, V, p.845)という加筆がなされている。つまり、自分の悪徳にも目を向け、「全てを言うことを自らに課す」ことが、人に言えないようなことは行わないよう、自己を「節度」ある状態に保つ方策に他ならないとモンテーニュは考えていたのである。

人間を悪へ接近させない第一段階、モンテーニュによれば、それは自己や他者の欠点に目を向けることなのである：「このような困難な時に善良であることの最も立派なしるしは、自分や他人の欠点を率直に認め、力の限り悪への傾向に抵抗し、その歩みを遅らせ、やむをえずその傾きに従いながらも、より良い状態を望み願うことである。」(III, IX, p.993)しかしまた一方、人は自分の欠点ばかりでなく美点についても率直に語るべきだとモンテーニュは言う。第3巻第8章のタキトゥスについて論じる件において、自分がローマで名誉ある官職を果たしたことに関して、タキトゥスが「ひけらかすためにこのことを言ったのではない」と弁解しているのをモンテーニュは少し卑怯であると言い、その理由を次のように述べている。

<sup>11)</sup> というのは、自己について思い切って率直に語ることをしないということ、はいくらか勇氣に欠けているからである。剛直で高邁な判断力を持つ人、健全で確実な判断をする人は、いかなる場合にも自分自身を他の事物と同様に例に用い、自己についても第三者についてと同様、率直に証言する。(III, VIII, p.942)

「自己について思い切って率直に語る」というのはこの場合、自己の美点につい

でも弁解などせずに腹藏なく語るということを意味しており、タキトゥスは、弁解というその行為ゆえに批判されているのである。モンテーニュにとって、自己の「ありよう」<sup>コンディシヨン</sup>について、その欠点も美点もあますところなく率直に語ることこそが重要なのであり、自己を「節度」ある状態に保つことによって「*vertu*」は実践され得るのである。

＊

ところで、以下の引用は、『エッセー』の序文「読者へ」の一節である。

<sup>(A)</sup> 私は、単純な、自然のままの、普段の、気取りや技巧のない在り方での私を見てもらいたい。というのは私が描いているのは私自身だからである。そこには、世間様が許して下さるかぎり、私の欠点や自然の姿があらのままに読みとれるであろう。(AU LECTEUR, p.3)

モンテーニュはこの序文において、『エッセー』の題材が自分自身であるということを明記し、自分の欠点をもありのままに描くという決意を示している。すなわち、モンテーニュが「*vertu*」を実践するために有効な方法と唱える、自己についてありのままの姿を、欠点も含め赤裸々に描くこと、それはまさに彼が『エッセー』を書いた目的そのものだったのである。

それでは、モンテーニュは自分のありようを公表することで、どのような効果を得ていたのであろうか。既に考察したように、モンテーニュは、自己の問題としてではなく一般論としてではあるものの、「もし全てを言うことを自らに課すすれば、黙っていなければならないようなことは何もしないように拘束されるであろう」と記述していた。では、果たして彼自身、全てを言うことで自らを拘束したのであろうか。もっとも現代の我々にとって、モンテーニュの日常一般の言動そのものを知る術は無い。だが『エッセー』の中の次の記述によって、モンテーニュ自身がこの点について如何に考えていたかを推察することができよう。

<sup>(B)</sup> 私は自分の生き方を公表するというのが、ある程度自分を規整するのに役立っているという点で思わぬ利益があるのを感じている。〔中略〕この公の宣言は、私を自分の行くべき道にとどまるように、私のありようのイメージに矛盾しないように私を拘束する。(III, IX, p.980)

モンテーニュは実際に、自己の「ありよう」<sup>コンディシヨン</sup>を『エッセー』という著作の中であり



のままに公表することによって、自らを「規整」するに到ったと言明している。つまり「全てを言うことを自らに課すとすれば、黙っていなければならないようなことは何もしないよう拘束される」という一般論は、そのままモンテーニュ自身の自己規整においても具現されているのである。モンテーニュは『エッセー』という著作において自己を描くために自分自身を整え、自己を形成した。すなわち『エッセー』の記述の特徴的方法である、所謂「自己描写」を行うことによって自らを「節度」ある状態に保ち、「*vertu*」を実践したのである。

本論冒頭の引用にあったように、晩年のモンテーニュにとっては、「快樂」こそが「*vertu*」の第一義に他ならなかったが、それは彼自身が影響を受けたエピクロスの「快樂」よりも実際的で官能的なものであった。エピク罗斯は「苦痛のない状態」こそが求めるべき「快樂」であるとしたが、モンテーニュにとって重要であったのは、「快樂」を避けることも、それに没入しすぎることもなく、「節度」を持って「快樂」を求めることであった。また、その上さらに、自己についてその美点も欠点も隠すことなく率直に全てを語ることが「節度」を得るための有意義な方法と考え、自身、『エッセー』という著作において、自己のありようを赤裸々に公表することで、自己を「節度」ある状態に維持したのだ。「自己描写」という『エッセー』特有の記述方法を通して、はじめて彼の「*vertu*」は実現されるのである。

(大阪大学博士課程在学)